

2016年1月8日 全9頁

# ラオス発展の方向性

## 農業、鉱物資源、水力発電中心だが、労働集約型組立や観光も

DMS（ヤンゴン駐在）  
佐藤清一郎

### [要約]

- ラオスは、インドシナ半島の中間に位置し、周辺を中国、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムに囲まれ海に面していない国である。亜熱帯地方に属し雨量も多く農業に適した気候風土で水力発電も盛んである。また、銅を中心に鉱物資源にも恵まれている。一方で、港へのアクセスが悪く、物流コストが高いため、本来的には、製造業進出には適さない立地である。
- しかし、このところ製造業進出が増加し始めている。第一の理由は、タイの人件費上昇で採算が取れなくなった企業が、労働集約的な部分をラオスに移していることがある。ラオスは人件費が安い他に、タイ語が通じるのでタイに進出している企業としては労働者の訓練が容易となる。
- 第二には、東西回廊の完成で、物流コストが下がってきていることである。メコン川にかかる橋の近くに工業団地ができて製造業が進出してきている。しかし、本格的に工場全体をタイから移転するには、依然として立地が悪すぎるため、あくまでも、労働集約的な生産工程の一部分をラオスで生産するというレベルに留まっている。
- 物流環境変化の可能性の観点では、中国がラオス内に中国ラオス鉄道の着工を開始していることも注目される。完成すれば、タイやベトナムへのルートが広がることになり、ラオスとしてはビジネスチャンスが拡大する。
- ラオスの経済開発は、立地の特性から考えて、他のアセアン国とは戦略を異にする可能性が高い。すなわち、工業団地への製造業誘致による工業化というよりは、農業の高付加価値化、鉱物資源開発、水力発電、観光産業振興などが主な成長ファクターとなっていくであろう。

## 1. ラオスのロケーション

ラオスは、アセアンの加盟国の一つである。カンボジア、ミャンマーとともに開発が遅れた地域として開発重点地域に位置づけられている。インドシナ半島の中央に位置して、周りを、中国、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムに囲まれており、海に面したところはない。インドシナ半島を南北に流れるメコン川は、ラオスとタイとの国境となっているが、メコン川は、カンボジアの近くで20メートル程度の落差のある滝となっており、メコン川を海まで続く水上交通手段として利用することは難しい。こうしたことで、ラオスは陸の孤島のような存在である。国土面積は日本の本州ほどありそれほど小さな国ではないが、人口が660万人ほどしかいない。首都ビエンチャンの人口は、81万人（JETRO資料、2013年）と、他のアセアンの首都に比べるとかなり少ない。政治体制は、人民民主共和制で一院制、いわゆる社会主義体制である。17の県とビエンチャン都より構成され、サワナケート県95万人（同）、チャンパサック県67万人（同）などが代表的な県である。使用通貨単位はキップである。為替レートは、1ドルが約8,100キップであり、ベトナムやインドネシアよりは、やや高いレベルである。

他のアセアンの国々をみてもわかるように、国の経済発展は、産業構造の高付加価値化を伴いながら行われていくというのが通例である。すなわち、農業から製造業、そしてサービス業へと移り変わっていくわけである。しかしラオスの場合、海がなく、物流コストも高く、人口も少なく、製造業が発展できそうな土壌がない。そのため、単純に工業化を進めて経済を発展させていくという開発のやり方は、すぐには当てはまりにくい。だとすれば、ラオスは今後、どのような戦略で国を発展させていこうとしているのかは興味が湧くところである。

こうした問題意識の下、日本アセアンセンターが主催する投資視察ミッション（2015年12月13日～2015年12月18日）に参加して、首都ビエンチャンと南部の都市パクセを訪問した。ラオスオの開発状況を垣間見ることができたので、以下、そのあたりの事情について記述する。

図表1 アセアン加盟国概要

国名	国土面積		人口		名目GDP		一人当たり GDP(ドル) 2014年	人口年齢 (中央値、歳) 2010年	証券取引所 設立年
	(平方km)	(%)	(千人) 2014年	(%)	(億ドル) 2014年	(%)			
ブルネイ	5,765	0.1	417	0.1	151	0.6	36,607	29	2002
カンボジア	181,035	4.1	15,328	2.5	166	0.7	1,081	23	2011
インドネシア	1,860,360	41.9	254,455	40.7	8,886	36.9	3,534	28	1977
ラオス	236,800	5.3	6,689	1.1	117	0.5	1,693	21	2010
マレーシア	330,252	7.4	29,902	4.8	3,269	13.6	10,804	26	1964
ミャンマー	676,577	15.3	53,437	8.5	628	2.6	1,221	28	2015
フィリピン	300,000	6.8	99,139	15.9	2,849	11.8	2,865	22	1927
シンガポール	710	0.0	5,507	0.9	3,081	12.8	56,319	38	1973
タイ	513,120	11.6	67,726	10.8	3,738	15.5	5,445	34	1974
ベトナム	331,051	7.5	92,423	14.8	1,860	7.7	2,053	28	2000
<b>アセアン</b>	<b>4,435,670</b>	<b>100.0</b>	<b>625,023</b>	<b>100.0</b>	<b>24,745</b>	<b>100.0</b>	<b>3,991</b>	<b>28</b>	

参考： 日本 377,835 126,795 46,163 36,332 45 1878

出所：IMF、アセアン事務局などよりDMS作成

## 2. ラオス（ビエンチャン、パクセ）の印象

ラオスの首都ビエンチャンに降り立っての第一印象は、日本の地方都市の雰囲気似ているというものだった。JETROの資料によれば、ラオスの2014年度(2014年10月～2015年9月)計画の一人当たりGDPは、1,880ドルだが、首都のビエンチャンだけをみれば4,390ドルである。ビエンチャンは、それなりに発展した都市ということになるが、高層の建物は少なく遠くまで見渡せる風景である。ごみなども落ちておらずきれいである。また、新興国の街中にありがちな、子供が車に寄ってきて物を売る風景もなかった。規模感は異なるが、大規模開発が進むミャンマーの首都ヤンゴンとは、全く趣を異にしている。走っている車は、韓国車(HYUNDAIとKIA)が多かった。これは、1997年に進出した韓国のKOLAOグループが注力しているためである。最近では自動車ローン積極的に展開していることで、更に売れ行きが良くなっているようである。乗用車は、新車と思われる割合が高く中古車は少ない。中古車の輸入には厳しい条件規制がかかっており実際上輸入できない状況となっている。朝方少し渋滞はあるが、ヤンゴンに比べれば、全く気にならないレベルである。

街の中心部と言われる場所も、ここが繁華街なのかという程度でしかなく、夜の9時頃には、町全体が真っ暗になってしまう。日本の田舎に似ている。レストランの味は、ミャンマーとは違って、それほど悪くなかった。宿泊ホテルから徒歩圏内にメコン川が流れていたの、朝早起きしてメコン川を見に行ったら。乾季ということもあり水量が少ないこともあるが、川幅は想像したより狭かった。街中では、中国資本によるショッピングモールや複合施設の建設が行われており、至る所で中国語の看板を目にした。また、中国からラオスへの鉄道建設計画も順調に進んでいるようで、ますます中国の影響が高まってくるような印象を受けた。

ラオス南部のパクセという街は、標高が高く、気候はかなり涼しかった。ビエンチャンに比べると更に田舎にきた印象で、街中の渋滞は全くなかった。パクセでは、日本の中小企業のみを対象にした工業団地の開発が進められている。代表者の話では、この工業団地は、日本の大田区の中小企業工場をイメージしているようである。ゆくゆくは、日本の中小企業が持つ優れた技術を継承して、将来的には、世界有数の技術を持った企業が生まれることを狙っており、今後の展開が楽しみである。

パクセは、タイの国境まで50キロメートル程度のロケーションということで、タイから沢山の観光客が訪れていた。メコン川下流のため、川幅も広くなり、湖のほりにいるような錯覚を覚える風景であった。2時間ほど行ったところには、アジアのナイアガラと言われる滝があり観光名所のようなものである。この他ワットプーという世界遺産がある。パクセが属するチャンパサック県は、高原での農業の他、観光都市としての価値もありそうだと感じた。ビエンチャンで感じた中国のプレゼンスはあまりない。ここでは、タイの影響が圧倒的であり、タイパーツも普通に使える。

図表2 パクセにある工業団地の看板



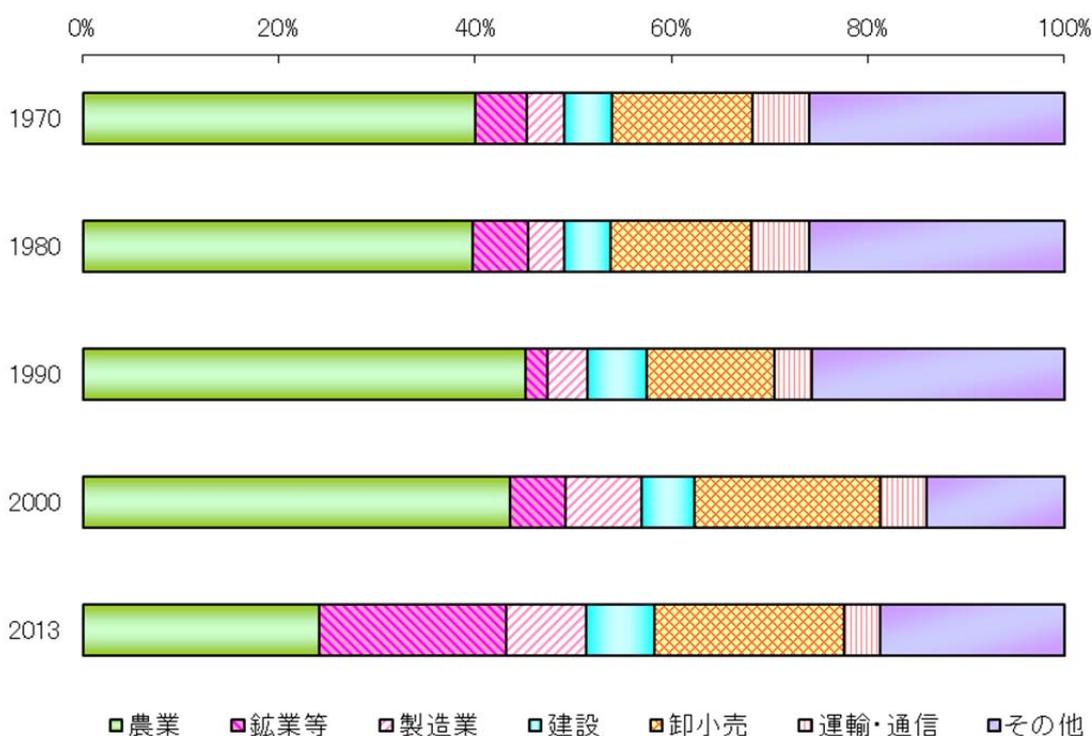
出所: DMS 撮影

### 3. ラオスの産業 ～基本は農業国だが製造業の労働集約工程もあり～

ラオスは、その立地からして、港へのアクセスが悪く、また人口も少ないため製造業が本格的に拠点を構えるには適さない国であるが、亜熱帯地方に属して、雨量も多く農業には適した気候風土である。そのため古くより農業に従事して自給自足的な生活をしている人が多く、全体の7割は農業関係従事者と言われている。こうした環境を活かして、ラオス政府は農業の高付加価値化を目指して、オーガニック栽培などを推奨している。2000年以降はプランテーションへの投資が進んで、キャッサバ、バナナ、サトウキビ、天然ゴム、コーヒー、アカシア、ユーカリ等の大規模な商業栽培が全国に拡大している。日系としては、ツムラが生薬を栽培、王子製紙がユーカリを植樹している。これらは有力な輸出商品に育ってきている。今回、ラオス南部のパクセを訪問して、無農薬農場（タイ資本）とコーヒー工場（ダオコーヒー）を訪問した。無農薬農場（タイ資本）では、主なマーケットはタイということで、収穫した野菜は陸路8時間かけてタイのバンコクまで運んでいる。標高が1000メートル程度の高原に位置して害

虫も少なく、味の甘い野菜が収穫されて好評のようである。無農薬野菜への需要は年々増加しており、農場の作付面積の拡大を考えているようだった。日本で言えば、長野県の高原野菜を東京の築地に運んでいるようなものなのだろう。無農薬ということに関しては、相応の顧客がいると思われるため、このビジネスは、今後も順調に推移して行くであろうとの印象を持った。コーヒー工場（ダオコーヒー）の工場内は清潔感があり、きれいであった。コーヒー豆は、周辺の農家と契約して調達している。コーヒー豆を焙煎する機械はドイツから、梱包する機械は日本から輸入しているようである。主な輸出先は、タイやベトナムで、労働者に関しては、350人の内200人はベトナム人である。ラオス人は、機械を使えるレベルの人は少なく、仕方がないとのことであった。ただ、将来的には、人材教育を行ってラオス人の従業員を増やしたい考えのようである。工業の横には社員寮を設置、また、工場内には社員食堂を設けて従業員の労働環境に努めている。

図表3 ラオスの産業構造の推移

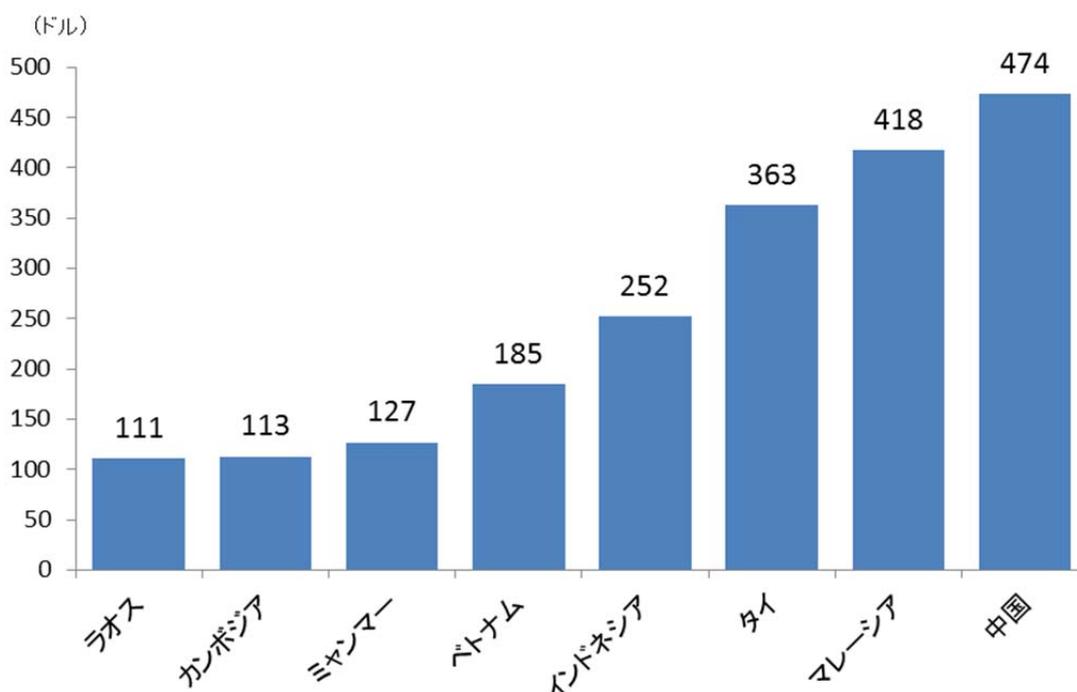


出所：国連より DMS 作成

ラオスの産業構造の推移を見ると、2000年以降、鉱業が大幅に割合を高めてきている。これは、中国やタイの成長に伴う資源需要増により、ラオスが外貨獲得を目的に銅や鉱物資源開発を積極的に進めたことが理由である。しかし、資源への過度の依存は、一次産品価格の変動に大きく揺さぶられる経済となり不確実性が高まるため、政府としては、徐々に、この部門への投資を減らしていく方向のようである。

製造業は、付加価値シェアを拡大してきている。製造業に適さないラオスに、何故製造業が進出し始めているのか。その最大の要因は、タイにおける人件費上昇である。ラオスは海に面していない陸の孤島なので物流コストは高いが、タイでの人件費の上昇はそれ以上に大きく、絶対的に人件費が安いラオスに進出すれば、物流コストを考えても採算が取れるようである。ただ、物流コストを最小に抑えるため、進出の場所は物流コストが最小となるようなところを選んでいく。たとえば、東西回廊ができたことでタイとの距離が近くなったサワンナケットには、ニコン、トヨタ紡織、アデランスが進出している。首都のビエンチャンの近くには、台湾系が開発した VITA Park という工業団地に、MMC エレクトロニクス ラオス（三菱マテリアル子会社）が進出していた。この工業団地の近くには、将来、中国ラオス鉄道の駅ができる予定となっており、そうなれば、物流コストがかなり削減できる可能性が高い。

図表 4 工場一般工職の月給（2014年）



出所: JETRO より DMS 作成

物流コストが高いため、タイから大規模な形で工場移転を決断する企業は少ない。部品が画一的でないものや、かつらの植毛など極めて労働集約が求められる部分だけを抜き取ってラオスに移して、そこで加工したものを再度タイの工場に戻して、最終的にはタイ製として他の国に輸出するやり方をとっている。何故なら、タイ製のブランドはある程度確立されている一方で、ラオス製のブランド力は低いためである。今後も製造業がラオスを利用するやり方は、現在のレベルを超えることはないと思われる。すなわち、労働集約的な生産工程をラオスで行い、それ以外はタイの工場で行うということである。ラオスでも将来的には人件費が上昇してくると思われるが、輸送機器などの製造業大手が進出しにくい立地となっているため、賃金の上昇

スピードは、タイと比べて緩やかであろうと予想している企業が多く、それも、ラオス進出を決めた理由の一つのようであった。人件費だけを考えれば、ミャンマー進出の可能性もあったが、ラオスはタイ語が通じるので、タイ進出企業としては、タイ語のマニュアルをそのまま使えるという利便性からラオスを選んでいるようである。

図表5 パクセにあるカツラ工場作業風景



出所：DMS 撮影

建設部門も割合を高めている部門である。これは、卸・小売業が外資に全面的に開放されたことが大きく影響している。ビエンチャンの街中を見ると、中国系と思われるショッピングモールが沢山建設されているのが目に付いた。この他、大型複合施設の建設も、中国やベトナム資本を中心に進んでいる。

ラオスへの直接投資に関して、国別及び分野別の動きを見ると、まず国別では、中国、タイ、ベトナムという周辺国の存在感が大きい。中国は全体の23.0%、タイは同19.1%、ベトナムは同14.5%となっている。中国の思惑は、ラオスの資源狙い、将来的にシンガポールまで通じる鉄道の拠点、国内の消費市場狙いなどがあると思われる。タイは、資源狙いの他、メコン川で

橋がかかっているところでは交通の便が良くなってきているので、それを利用したラオスでの農業分野への投資やラオス国内の消費市場狙いなどがあるであろう。ベトナムは、ラオスの中部及び南部を中心に物流拠点作りや、農業分野への投資があると思われる。次に分野別の動きを見ると、発電、鉱業、農業の順番で多くなっている。発電は、全体の28.5%、鉱業は同24.3%、農業は同11.9%となっている。

**図表6 国別直接投資認可額**  
(1989年～2014年累積)

	金額(億ドル)	割合(%)
中国	54	23.0
タイ	45	19.1
ベトナム	34	14.5
韓国	8	3.4
フランス	5	2.1
日本	4	1.7
オランダ	4	1.7
マレーシア	4	1.7
ノルウェー	3	1.3
イギリス	2	0.9

出所：JETRO より DMS 作成

**図表7 分野別直接投資認可額**  
(1989年～2014年累計)

	金額(億ドル)	割合(%)
発電	67	28.5
鉱業	57	24.3
農業	28	11.9
サービス	25	10.6
工業・工芸	20	8.5
ホテル・レストラン	10	4.3
建設	8	3.4
通信	6	2.6
木材	4	1.7
銀行	4	1.7

出所：JETRO より DMS 作成

#### 4. ラオス発展の方向性

ラオスは、2030年を目処に一人当たり国民所得8,200ドル以上と、上位中所得国入りを目指している。そこに向かって、どのような発展経路を歩んでいくのであろうか。

気候環境は農業に適しているものの、港へのアクセスが悪く製造業誘致が難しいラオス。この点を考えた場合、今後の開発の優先順位は、やはり農業を中心としたものになるのが一番自然な形であろう。中途半端に工業化に取り組もうとして工業団地を増やしても、物流コストが高いという構造問題が解決されない限り、本格的な製造業誘致は期待できないため、無駄に終わる可能性も高い。現在ラオスには11の経済特区があるが、これ以上増やす選択はせずに、既

存の経済特区のパフォーマンスを確認しながら、維持するか、閉鎖するかを決めていくのが良いであろう。

隣国の中国やタイとの関係を見ると、まず、中国は中国ラオス鉄道を建設して、インドシナ半島を南下するルートを開発しようとしている。これが完成すれば、物流コストが更に低下していく可能性が高いため、ラオスとしては、ビジネスチャンスが拡大していくだろう。タイに関しては、東西回廊の完成により新たな物流ルートができたことで、ラオス国境付近を中心に経済特区を建設し始めている。これも、ラオスの労働集約型組立産業のチャンスを拡大する可能性が高く成長にプラス要因として働くであろう。

農業分野以外の取り組むべき分野としては、やはり豊富な水量を利用した水力発電事業であろう。これを隣国のタイや中国に輸出していくことで外貨獲得へとつながる。また、観光産業も力を入れるべき分野である。ラオスは、周囲を、中国、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムに囲まれていることで、これらの国からの観光客を大いに期待できる。観光資源としても、美しい自然、世界遺産など魅力的なものは多く存在する。

図表 8 アセアン加盟国の外国人観光客数（単位；千人）

	2012年			2013年			2014年		
	アセアン域内	アセアン域外	全体	アセアン域内	アセアン域外	全体	アセアン域内	アセアン域外	全体
ブルネイ	116	93	209	3054	226	3279	3662	223	3886
カンボジア	1514	2070	3584	1832	2379	4210	1992	2511	4503
インドネシア	2608	5437	8045	3516	5286	8802	3684	5752	9435
ラオス	2713	618	3330	3041	738	3780	3224	935	4159
マレーシア	18810	6223	25033	19106	6610	25716	20373	7065	27437
ミャンマー	151	908	1059	219	1826	2044	1598	1483	3081
フィリピン	375	3898	4273	422	4259	4681	462	4372	4833
シンガポール	5733	8759	14491	6115	9453	15568	6113	8982	15095
タイ	6463	15891	22354	7410	19136	26547	6620	18160	24780
ベトナム	1364	5484	6848	1440	6132	7572	1495	6379	7874
アセアン全体	39846	49380	89225	46154	56045	102199	49223	55861	105084

出所：アセアン事務局より DMS 作成